ると美味で、脂肪を補った。山中で半年間、雪で顔を洗うだけで、体はそのまま、下着はシラミの巣となった。

十二月となり、ダモイ(帰る)だという。三度目の正直、本当なればよいが、原始林を後にナホトカに、船を待つこと二、三日、日章旗をひるがえして復員船山澄丸が入港、みんなの感激、タラップを踏む足取りもはじめてかるい。

山澄丸は日本海の荒波をけたてて一路舞鶴へ、「国破れて祖国あり」祖国の山容は緑に映えて傷心の我等を迎えてくれた。

今日も暮れ行く異国の丘に　友よつらかろ切なかろ
我慢だ待ってろ嵐が過ぎりゃ　帰る日も来る春もくる

望郷の涙にくれながら、帰る日まで体力が持たず、シベリアの土となった戦友のことを思えば、今でも胸が痛む。戦後の私達の奴隷的生きざまを広く世間に知ってもらいたい。

亡き戦友の鎮魂譜として拙いこの一文を捧げます。

私の戦争体験記
バッタと小便汁と号笛

林　寅　喜
(会員　佐伯市中の島町)

私は昭和二十年一月、横須賀海軍工作学校へ普通科練習生として入校した。というよりもさせられたと言った方が適切かも知れない。

それは当時旧木立村で十七、八歳から三十歳代の男性で軍隊か徴用に取られず、村に残っていた人は指を折って数える程しかいなかった。したがって、かくいう私も二十歳の徴兵検査を待たず、十八歳で海軍に志願(催促)させられたわけである。しかし、生来ひ弱であった私の検査結果は丙種であったから、まさか取られるなどとは思ってもいなかった。そうしたことから入校式の当日、担当した教班長達(下士官)は、丙種まで(外にもいた)入校してくるとは思ってもいなかったらしい。

因に徴兵検査の基準は甲種・第一乙種・第二乙種・丙

種の四段階であったと思う。しかし、これも後になって丙種には丙種に適した軍役があるということがわかった。それは戦局が一段と厳しさを増したからか、新兵教育も二ヶ月で切り上げられて、金田湾（神奈川県三浦市南下浦町）の築城分隊に配属され、トーチカ造りをして佐世保に帰属後も、福岡市姪の浜で炭鉱の石炭液化施設建設のため、終始土工として働かされたからである。

こうして三ヶ月（実際は二ヶ月）に亘る新兵教育が始まったが、工作学校は浦賀の久里浜に在って、練兵場の外れにはペリーの上陸記念碑があった。

海軍の新兵教育は通常一個分隊十個班約三百人で編成され、学校の体育館のような広い二階建ての兵舎で起居していた。兵舎の中央には幅二メートル程度の通路があり、左右共三メートル前後の間隔で柱によって仕切られ、天井には頑丈な梁が縦横に組まれて、それに？形のフックが等間隔に打ち込んであり、夜はハンモック（吊り床）を吊って就寝し、昼間はテーブルを置いて食事や学習、またカバーを敷いて兵器の扱い方から手入れ等に使い、分隊長の講義や甲板（デッキ）掃除の時は梁上に揚げていた。なお、ハンモックや日用品を入れた衣嚢（いのう）袋は四隅に収納されるように設備されており、壁を隔てた両サイドは下士官室と準士官の個室となっていた。

◆『バッタ』のこと

海軍では　工作兵が兵隊ならば
　　蝶やトンボも鳥のうち

と言って他の兵科からは揶揄されていた。もっとも工作科は後々旋盤・鋳造・鍛冶・板金・木工の五種に別れ、専ら修理を専門とした技能職種で、多くは入校前の職業によっていたが、（私の場合、建築設計の経験があった）新兵教育は外の兵科と何等変わることなく厳しかった。それは軍事教練を始めとしてカッター訓練から日常生活、海軍特有の甲板掃除に至るまでであった。ことに海軍では連帯責任が強く要求され、一人の違背者や脱落者によってその班全員がシゴキ（制裁）を受けることが多かった。

海軍の飯を食って『バッタ』の世話にならなかった人はいなかったと思う。『バッタ』は軍人精神注入棒といって、農具の柄と同じような堅木の棒に墨書していた

が、『呑み先』のように先端部が角張ったもので叩かれるのが一番痛かった。これで叩くのは尻の肉が盛り上がった部分で、他所と比べて多少神経が鈍いとはいうものの、痛いことに変わりはない。ことに最初の一本と二本目が最も激しく、後は痺れて局部麻酔を掛けられたようになり、充血して紫色に腫れ上がる。私は最高七本であったが、新兵教育が終わって実施(陸上)部隊や艦隊勤務に配属されると、古参兵のシゴキが凄まじく、こんな生易しいものではなかったらしい。

忘れもしない昭和二十年三月十七日、硫黄島の日本軍が全員玉砕したと報道された夜、消灯後新聞の内容を当直下士官が全員に読んで聞かせ、『眠らずに聞いておれ』ということであったが、たまたま昼間の疲れからか一人鼾をかいているのが見つかり、引きずり降ろされて叩かれた。外の者は起きてはならないということで、数えていたら四十数本であったと覚えている。後で小用のため起きて見たら同僚が水で冷していたが、こうなるともう人間どころの騒ぎではなく牛馬も同然と思った。しかし、農耕に使う牛馬でもこうは叩かない。そう考えて身の毛のよだつ思いをした。

◆『小便汁』のこと

題材が不潔で申し訳ないが、当時巷でこんな唄が流行っていたのを御存知だろうか、

嫌じゃありませんか軍隊は
金の茶碗に竹の箸
仏様でもあるまいに
一膳飯とは情なや

海軍の食器は飯と汁と漬け物皿と湯呑みの四種で、何れもアルミか鉄板製に塗料を施したものであった。飯は三食とも五分搗き程度の米に麦が混じったものであったが、汁の方は水に醤油で少し色付けしたような中に、馬鈴薯や人参などの野菜が申し訳なさそうに浮かんでいる程度だった。海軍ではこれを称して『小便汁』と呼んでいたが、これではお菜にならない。そこで汁掛けをする。ところが食事の際の汁掛けと漬け物・梅干し類を三切れ、または三個(これは身を切るという諺から来たものらしい)にすることは許されておらず、見付かったらコッピどくシゴかれたものである。

そんな食事が三度三度(夜は少し増しな物が出た)では二十代の若者にカロリーの足りる筈もなく、皆栄養不

足から来る脂肪分の欠乏でヒビや赤切れに罹り、指先きが割れて血が滲み、ハンモックの吊り下ろし度びに泣きながらロープ(麻縄)を操作する者が多くいた。殊に新品のロープは硬くてより惨めであった。それでも決められた時間内(確か一分以内だったと記憶している)には終わらねばならず、軍隊という集団はそんなところが実に非情であった。

そこで勢い自由時間となると食い物の話で持ち切り、青春の真っ只中にありながら色恋の話など微塵もせず、只管食うことばかり考えていたのである。今思うと言い様のない悪夢の時代であった。

付け書き『ギンバイ』のこと

食事は各班共二名の食卓番が出て、烹炊場(にうすいじょう)で食管を受けて帰り配食する。勿論教班長も同席して食事するが、各班共班長の好みによって最初に配食するから、同じ材料でも差がつく。

ところが、彼等には一般兵と違ってもう一つの特典があった。それが『ギンバイ』である。それは主として夕食後行われていたようであるが、各分隊の下士官室付従兵が、烹炊場に行って残り物を貰ってくるという仕組みであった。

海軍では下士官以下の食事と士官食は違っていた。その士官食の残りが目当てであったらしい。外に缶詰めや保存食まであったというが、一兵卒の我々では知るよしもなかった。

❖『号笛』のこと

『腐れ味噌も取りどころ』という諺がある。それは前述のような厳しい訓練と教育をした海軍にも、唯一つ見習うべき点があったということで、それが標題の号笛である。

海軍では艦隊勤務を必須条件として教育し訓練していた。ご存知のように艦は水に浮かぶ。一隻には何十・何百・何千もの兵隊が乗っている。その運命は艦長一人の双肩に掛かっている。したがって、緊急の場合艦長の命令が隅々まで届くのに時間が掛かってはならない。そこで号笛が使われた。それはモールス信号に似て幾通りかあったが、新兵教育で最も厳しく訓練されたのが号笛一つによって静寂となることであった。

これがなかなか実行出来ず説教された。初め書いたように一個分隊三百余人が自由時間ともなると可成り騒動しい。それをたった一度の号笛で水を打ったような静寂にする。そうすれば小声でも伝達は隅々まで届く。このように、厳しかった旧海軍にも優れた一面があったと今でも思っている。最近各種行事はおろか、大学の講義時間中まで私語が絶えず、主催者や学校関係者を悩ましているという。こうしたことは事の良し悪しは別として、見習うべきではなかろうか。

宇佐日帰り研修報告

研修部　小野英治

四月十日(土)、予定どおり宇佐日帰り研修を実施した。参加者は十二名と少なく、当初のマイクロバスはキャンセル、二車に便乗することとなった。

往路の別府宇佐間は高速道が濃霧で、別府から一般道となったので、宇佐歴史博物館到着が予定より三十分余遅れ、十時半過ぎとなった。館内では、女子職員による概要説明があったが、熟知した専門職でないためか、いまいち。その後、自由見学をしたが、展示品のほとんどがレプリカであり、本物と区別がつかないのには驚かされた。

昼食後、依頼していた宇佐市立図書館の井上治広氏と、宇佐市教委文化課の林一也氏の御案内で、市指定史跡宇佐航空隊跡と関連史跡、国指定建造物豊前善光寺本堂、県指定史跡光岡(みつおか)城、国指定史跡四日市横穴墓と見学させていただいた。

御両人は専門的に研究されているだけに、詳細で理解しやすい説明には感謝するばかり。実に有意義な研修であったが、宇佐市はさすがに文化財を大切にして活用していると、感心させられたものである。

帰途は霧も薄れ、予定通り十七時前には、弥生、佐伯と到着したが、研修部としては、もっと多くの参加者があってほしかったと思った。

それは現地説明が充実したものであったことにもよるといえよう。